

分類 番号	A18	取組 名称	府内高齢者の熱中症被害低減策としての住まいの環境改善と温度認知による行動変容の促進
研究代表者：	生命環境科学研究科		職・氏名： 教授・松原 齋樹
研究担当者：	京都府立大学（生命環境、松原齋樹、柴田祥江、野本彩（敬称略）） 外部分担者・協力者（福林範子氏、後藤隆氏 山内尚美氏ほか）		
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名）	京都府宇治市、一般財団法人日本老人福祉財団 京都ゆうゆうの里		
【研究活動の要約】			
<p>高齢者の熱中症は住宅内での発生が半数以上であるので、予防策として住宅内の環境改善が大切である。夏期の住宅内温熱環境改善には、様々な方法があり、中には比較的簡便に実現できるものもある。例えば、冷房の他にも、大量に流入する日射熱を遮蔽することや通風を促進することなどがあげられる。本研究では、「高齢者の住まいの夏期温熱環境の実態」「日よけシェードの物理的な効果」「取組による居住者の意識・行動の変化」の3点を明らかにすることを目的とした。</p> <p>京都府内の有料老人ホーム入居者を対象に、「住まいにおける暑さと健康についてのアンケート調査」と同意の得られた10軒（表2）の住宅に日よけシェード(ポリエチレン製)を設置し、設置前後の室内温熱環境の測定を実施した。あわせてヒアリング調査を実施した。</p>			
【研究活動の成果】			
<p>アンケート調査の結果、熱中症への関心は95%の人が持っている。温度計確認頻度で比較すると、確認頻度が少ないほど熱中症への関心も低い傾向があり、熱中症に対して関心がある人は温度計を確認する頻度が高い。防暑対策として「カーテン・ブラインド」は73.0%、「薄着」は71.1%、「冷たい飲み物」は42.8%が実践している。このように衣・食の面からの対策は気軽にできるため実践率も高い。しかし、カーテン・ブラインド以外の日射遮蔽は「すだれやよしず」が22.0%、「遮熱フィルム」が11.3%、「ブラインドやオーニング」が8.2%、「緑のカーテン」が6.9%であり、住宅面からの対策は十分に行われていないことがわかった。</p> <p>モニター調査の結果、9/10軒で室温の低下が確認された。室温低下という数値としての効果だけでなく、居住者の体感的にも涼しく感じることがわかり、シェードの設置である程度の日射遮蔽の効果が得られることが明らかになった。しかし、「見た目が良くない」等改善すべき点もある。また、「調査前は熱中症を他人事のように思っていたが調査を通して自分の事として考えられるようになった」等の意見が見られた。今回の調査により啓発行動ができ、居住者の意識や行動に変化をもたらしたと言える。</p>			
【研究成果の還元】			
<p>H29/3/15 京都・歴彩館 約80名京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）成果報告会 at 歴彩館」パンフレット「住まいと住まい方の工夫で熱中症対策」日よけと温度確認で夏期室内温熱環境を改善！を作成 希望者に配布</p> <p>H28/11/5-6 開催の第55回日本生気象学会にてポスター発表、H29/5/27-28 日開催の日本家政学会第69回大会にて発表</p>			
【お問い合わせ先】			
<p>生命環境学部環境心理行動学（建築環境工学）研究室 教授・松原齋樹 Tel: 075-703-5426 E-mail: n_mats@kpu.ac.jp</p>			

参考（イメージ図、活動写真等）

作成したパンフレット

11 水分補給・塩分補給も忘れずに

日常生活では、食事を摂りて1日1.2リットル！

運動前	作業時は	運動中	運動後
摂取量: 1.2L	摂取量: 1.0L	摂取量: 1.2L	摂取量: 1.2L
摂取回数: 7-8回!	摂取回数: 3-4回	摂取回数: 1.5L	摂取回数: 1.5L

運動前: コップ1-2杯
運動中: 20-30分おきにコップ1杯
運動後: 30分以内に

自然の力を利用して涼しさを得る工夫をしよう

日本の暑い夏を住まいと住まい方の工夫で乗り切りましょう。

日よけと温度確認で夏期室内温熱環境を改善!!

発行日: 2017年3月15日
発行: 京都府立大学生命環境科学研究所環境科学専攻
建築環境工学 環境人理行動学 研究室
問い合わせ: 〒606-8522 京都府京都市下鴨本町1-5
TEL: 075-703-5426
E-Mail: jshiba@ipc.kpu.ac.jp 担当: 柴田
京都府立大学平成28年度地域連携型特別研究(JACTRI)成果報告

モニター調査設置の様子



↑ 外側から撮影



↑ 室内側から撮影

シェード設置状況



↑ エアコン吹き出し口



↑ 居間

小型温湿度ロガー設置状況